

## 研究

## 幕末期プロテスタント受洗者の研究（三）

## ——史料に探る村田政矩——

中 島 一 仁

## はじめに

キリスト教禁制下の慶応二年、長崎で実弟の綾部幸熙とともに米国の宣教師フルベッキからプロテスタントの洗礼を受けた佐賀藩親類・村田政矩<sup>たのり</sup>（若狭）は、明治以来、さまざまな出版物に取り上げられてきており、日本キリスト教史では比較的良好に知られた存在である。現在はインターネット上にも多数の文章がみられる。<sup>①</sup> 欧米でもキリスト教禁制をもとめせず、信仰を貫いた日本の初期受洗者として語り伝えられている。<sup>②</sup>

一般に家老といわれる最上層の武士でありながら、長崎湾の波間に浮かんでいたキリスト教書を偶然手に入れ、八方手を尽くして一〇年以上にわたって聖書を研究し、秘密裏に洗礼を受けたとされる「秘話」が、多くの人々の興味を呼ぶのであろう。

筆者は既に弟綾部の生涯を史料に基づいて明らかにし、受洗の動機や彼の人生へのキリスト教信仰の影響について検討を試みた。<sup>③</sup> 本稿は村田について同様のことを行おうとするものである。綾部と比較すればその生涯や受洗の経緯が知られているとはいえ、従来の叙述には実証的とは言えぬ部分も少なからずあった。できる限り史料によって裏付け、誤りがあれば修正することを目標としたい。その上で、村田・綾部兄弟の受洗動機につい

ての考察を深めたい。

村田・綾部を含めた最初期のプロテスタント受洗者についての研究史を振り返ると、キリスト教の専門家のうち歴史に関心を持つ研究者や教会教師、クリスチャンの著述家らが専ら担ってきた。その叙述は主に外国人宣教師の残した書簡や回想録を使つたものであった。英米の神学校などに保存されていた原史料を掘り起こして和訳し、それに基づいて解明した業績は不動のものである。<sup>④</sup> だが、一方で国内の史料がほとんど使われなかったほか、根拠史料があいまいな明治・大正期からの伝記類を下敷きに叙述を繰り返し、いわば伝説の再生産をしてきた嫌いもなくはなかった。

他方、日本近世史学の側は従来、初期プロテスタント受洗者にほとんど関心を払うことがなかった。歴史学が近世におけるキリスト教に関心を抱くのは、幕藩制を成り立たせた柱の一つとしての鎖国体制に関してであつたからであらう。幕藩制国家の崩壊及び明治新政府の発足過程において、欧米列強との外交交渉に重要な影響を与えたという点で、浦上四番崩れや明治六年のキリスト教黙許には多くの先行研究がある。<sup>⑤</sup> しかし、村田・綾部ら個別信者について語られることはなかった。

できるならばこの二つの研究領域の隙間を埋め、近代日本社会の形成に少なからぬ影響を与えたキリスト教、就中プロテスタンティズムの移入が、その初めにおいて個人のレベルでいかなされたのかを考える手掛か

りしたい。

## 一、村田の「物語」の形成過程

確認できる範囲で村田・綾部兄弟の受洗についての最も古い記述は、一八六九年七月より前に米国のキリスト教系新聞 *The Sower* に掲載された記事である。この記事は、米国のキリスト教系新聞である *The Missionary Herald* 一八六九年七月号の記事に引用されており、そこには「(力のある大名の) 第一の家臣が二、三年前に日本にいる宣教師の一人から弟と共に洗礼を受けました」とあり、これは村田・綾部兄弟のこととしか考えられない。<sup>(6)</sup>

その後は、一八七七年にニューヨークで出版されたフルベッキの *"The First Baptism of Converts in Japan"*<sup>(7)</sup>、一八八三年に横浜で出版されたフルベッキの *"History of Protestant Missions in Japan"*<sup>(8)</sup> を挙げることができる。

日本語出版物における最古の記述は、管見によればそれらよりも遅い『基督教新聞』明治二四(一八九一)年一〇月二日号の「社説／故村田若狭守肖像成る」である。関貢米という人物が、村田の受洗を、大藩の重臣でありながらキリスト教禁制下に身を以て開明思想を受け入れた勇氣ある行動だと感動し、古写真をもとに肖像画を作製した、という内容である。

関は、フルベッキが属した改革派教会の開いた学校である東京一致英和学校(現明治学院)を明治一九年に卒業し、中学校の英語教師や大阪毎日新聞記者をつとめた人物である。<sup>(9)</sup> 前述の「社説」には、村田が聖書研究のために使った江口という家臣の名を挙げるなど、先行する英語出版物より

詳しい記述もみられ、関は同英和学校で先述の英文著作物を読んだり、宣教師から話を聞いたりして受洗の事実を知ったのだろうと想像される。

一八九三年には日本人と思われる J. Maeda が横浜で発行された雑誌に *"The First Protestant Believer in Japan"*<sup>(10)</sup> という英語読み物を書いており、その後は、日本プロテスタント史の概説書や一般向け読み物、または主にフルベッキに焦点を当てた著述の中で多数取り上げられてきた。

このように村田・綾部兄弟の受洗に関する記述は、まずは受洗直後に米国の出版物で紹介され、それらが日本へ逆輸入されて日本語出版物に書かれるようになったものだと考えられよう。

## 二、典型的な受洗の「物語」

現在、日本で語られている最も典型的な村田についてのストーリーの概要は次のような内容である。<sup>(11)</sup>

佐賀藩家老・村田政矩は一八五四(安政元)年、英国艦隊が入港した長崎に赴任していた。ある日、家臣の古川礼之助が長崎湾の海上を漂う小さな包みを見つけ、拾い上げたところそれは外国語の書物だった。この書物を村田は受け取り、幕府のオランダ語通訳に尋ねたところ、英語の聖書であることが分かった。さらに内容を知ろうと上海から漢文聖書を取り寄せた。

村田は、長崎にフルベッキという宣教師がいることを知り、藩家老の立場にある自身が訪ねるわけにもいかず、家来の江口梅亭を医学の勉強の名目で派遣した。さらに弟の綾部三左衛門と本野周蔵を

派遣した。聖書の学習は、英訳聖書・オランダ語聖書・二種類の漢訳聖書をテキストに行われた。青年たちの約四年間の勉強を経て、村田は一八六六（慶応二）年に綾部とともにフルベッキから洗礼を受けた。

村田は藩主鍋島直大に受洗の事実を報告したようだが、開明派の藩主は家老から引退させるだけで済ませた。村田は佐賀郡久保田村の自分の屋敷に帰り、嘉瀬川河畔の農家の納屋を借り、家臣や親族を集めてキリスト教の教えを広め、聖書の和訳にも取り組んだ。キリスト教禁制が解ける前の一八七二（明治五）年に死去した。

### 三、史料に見る村田政矩

前章の「物語」の中から八つの論点を抽出し、史料から見える村田像を探ってみよう。

#### （一）藩政を主導した家老像

村田の藩内における役職は「家老」とされている。ほかの既刊書・論文も同様である。前掲「長崎のフルベッキ」では「筆頭家老」としている。要するに佐賀藩指導部の中核に座り、藩政を主導した実務家のトップというイメージが持たれているようである。

村田家は、佐賀藩家中の最上層に位置する「親類」四家の一つであった。「筆頭家老」と書かれたのは、前掲のフルベッキの書籍に“Wakasa, the first Karo (Minister) of the prince of Hizen”とある<sup>(12)</sup>のが理由の一つであろう。

推測されるが、フルベッキは、一般に家老と言われる重臣の中でも最上層の家格であることを言おうとしたのであろう。

知行高は一万七七〇石と、陪臣でありながら大名級であった。村田の生家は家老の家格であった鍋島（深堀）家で、文化十一年、肥前・深堀（現長崎市）の屋敷で生まれた。文政八年に村田政恒の養子となり、すぐに同家の家督を継いだ（以下、村田の主な経歴については表参照）。

では、親類・村田家は藩家中でどのような存在であったのであろうか。

……由来、宗室は御親類と称へられて、公室の分身なれば、政令の上に超然として、執政の職を引き受くる事なく、之が監視に当る位置

【表】村田政矩の経歴

文政	8年	6月	12歳	家督
	10年	9月	14歳	神埼郡代
	〃	12月		隠居（→養父政恒が再家督）
天保	9年		25歳	弘道館頭人
	10年	9月	26歳	弘道館頭人。乍休息請役所日勤
弘化	3年	3月	33歳	再家督
	〃	秋		江戸屋敷都合頭人
嘉永	元年	9月	35歳	佐嘉郡代・勘定所
	2年	2月	36歳	隠居（→嫡子八介が家督）
	3年	12月	37歳	三たび家督
安政	2年	5月	42歳	長崎仕組方頭人
明治	元年	9月	55歳	乍休息請役所日勤
	2年	3月	56歳	政府日勤諸事申談
	4年	1月	58歳	隠居（→八介が再家督）

（「御親類御家老諸役 下」「御親類より中老迄代々覚書 上」「代々記 上」「請御意（明治元年）」「御意請（明治2年）」〈以上すべて鍋島家文庫〉、「龍造寺系図」〈東京大学史料編纂所〉から作製）

にあると共に、他方に向つては一門家老といひて、まゝ江戸にも出府して邸内の長となれど、平常は邸にありて優遊閑日月を娛しむを以て、自然遊惰に流れ易きものあり、……<sup>(13)</sup>

親類は対外的には一門家老と称し、藩内では法令に縛られない特権的な身分で、実務の最高責任者である執政にならずにその監督に当たつたとされている。実際、村田は藩政を司る請役家老（執政）にはなっていない（表参照）。「乍休息請役所日勤」は、請役への助言を行う役目であろうと想像され、一時的に藩政中枢にいた時期があつたのかもしれないが、大方は郡代や、藩校・江戸屋敷の責任者などを務めていた。

明治二年三月に任じられた「政府日勤諸事申談」は、激動の明治維新时期にあつて藩政の中心にある職と言えそうだが、村田の娘婿である親類、鍋島（白石）直高も同じ役に一緒に任じられており、娘婿の神代直宝（親類）が執政に就いたのに伴う、後見役的な意味が強かつたのではないだろうか。

村田家及び村田政矩に関しては、先述の引用に続いて次のような記述もある。管見では既刊書では紹介されることがないので、長いが引用する（「公」とは鍋島直正のこと）。

……久保田は龍造寺の本家にて、川久保より収入稍多かりしが、先代讃岐正恒より文化の華奢なる氣習に浸潤し、その用人本野嘉左衛門の頗る理財に長じたりしより、家計裕かなるを致して城北に広き邸を囲ひ、川流に水車を装置して笕より水を室内に引き用ゐたれば、久保田屋敷水車の音とて、深夜周囲の地に響くを以て評判なりき。加之同

家は常に娯樂遊戲を催はし、盲法師にして此邸に出入せざる者は世に之を上手とせぬといふ有様にて、由縁の者は往いて其演芸を見るを娛しむ等、優美の家風を長じたり。当主若狭正矩は深堀家より養子となりしが、幼時より長崎に蘭国より輸入せらるる、機巧品、時計、眼鏡、室内装飾、便利の器械等の蒐集を嗜好したりしを以て、西洋珍奇の物の此人より導かれて世に行はるゝに至りたるもの少からず、即ち文明平和の利器の使用は此人に負ふ所多きなり。彼は性格優良にして身長高く風采美なりしかば、長崎往來の奉行其他幕吏の彼に迎接したりし者は、天晴立派の家老よと褒めざるは無かりき。然るに公には質素儉約の躬行あり、……久保田家の風評は甚だ悪しく、華奢淫佚に流るゝものと衆より目せられたり。されば同列にも監察局にも、其瑕瑾を摘発し、その過失を列挙したりしかば、種々の非難を生じて、去年遂に隠居を願ひ出づるに至りしも、公はこれを抑へて裁決せられず、今度中折訓練場を設くるに及んで、其地開きの御手伝を久保田家に命じその隠居願を却下せられたりき。

村田の「洋癖」や高身長的美丈夫であつたことなどは既刊書にもよく出ている。しかし、村田家が豊かな財政で贅沢な生活を送り、藩主の儉約政策の前に藩内での評判が極めて悪く、他の重臣らや監察当局から科を摘発され、村田は隠居を願い出でざるを得なくなつた（前後から嘉永三年のこと）が、藩主が却下したことなどは知られていない。

別の史料には「若狭殿、家政向大形之儀有之候趣相聞、被仰聞之旨承知被仕、痛入用捨之段被申達候得共、右は夫二不及旨申達」とあり、嘉永六年にも暮らし向きが派手であることから進退伺いをしたが、藩主から慰留



されている。

表をみると、この時期の村田家当主には不自然な隠居・相続が多い。嘉永二年の村田の隠居は、「壮年之儀ニ付而は見合相成候様可被仰出候処、最前江戸詰中相聞候次第有之候ニ付」<sup>(16)</sup>とあるように、藩主の意向としては隠居願を却下したかったが、何やらよからぬ風聞があり、それを無視できなかったようだ。

「彼は和蘭船の入港する都度其筋の検査を経て蘭書を購読することを好み之が為に多額の費用を惜みなく支弁したるが如し。西洋の事物は凡て切支丹邪宗門なるかの如く誤解せしもの多し。斯る時代に於て西洋の書を読み、卓子や椅子を備ふは至難の事に属す。閑叟公の寛容なる処置なくんば到底企て能はざりしなるべし。其にしても村田氏は余り西洋好きのため立身上多少の損毛を受けたるが如し」<sup>(17)</sup>と、佐賀藩出身の大隈重信が評しているように、鍋島直正によって庇護されていた面があつたのではないだろうか。

## (二) 長崎出張の時期

村田が長崎港で外国語書物入手した年は、書籍によって安政元年と二年の両説がある。ただ、「英国船入港の時」としているのは共通している。

村田は安政二年五月に、佐賀藩の長崎警備の最高責任者である「長崎仕組方頭人」に任じられた<sup>(18)</sup>（表参照）。請役相談役を務め、長崎警備や軍艦買い付けなどの要務でたびたび長崎に出張していた佐賀藩士・伊東次兵衛の日記に、「同 十九日／一 今夕若狭殿崎着」<sup>(19)</sup>（「同」は安政二年七月＝筆者注）とあり、実際に長崎入りしたことが確認できる。

「昨九日長崎表英吉利船式艘相見候ニ付、役々出崎被仰付」<sup>(20)</sup>と、七月一日に佐賀藩で長崎警備役の藩士へ指示が出ており、これを受けて村田も長崎に赴いたのである。長崎警備は佐賀・福岡両藩が寛永一九年以来、隔年で務めてきた。安政二年は福岡藩の当番であつたが、イギリス船の来航で佐賀藩も緊急出動することとなった。もともと嘉永年間からロシア、イギリス、フランスの軍艦が長崎をひっきりなしに訪れており、安政二年七月という時期は、前年に日英約定を締結したイギリス海軍のスターリング少将が、同年三月に再渡航して批准を求めたが、日本側が八月に批准することを約していったん退去させ、三たびの来航を待っているころであつた。<sup>(21)</sup>

村田の長崎での動きを追ってみる。<sup>(22)</sup>

## 《七月》

① 一同年七月二十四日 上様今暁八ツ時御供揃ニ而矢上御発駕、明六ツ時過御着崎、御奉行所御目付御出御帰殿之上、陸路小ヶ倉御越、御備場御遠見若狭殿を以、ヶ所々々出張之面々何れも大儀被ニ思召一候。猶念入候様御意被ニ成下一御帰殿被レ遊候。

② 同 廿六日（天気）

一 御屋敷罷在候内、白帆註進有之候付、御用之有無、奉窺候処、御用ハ無之、則出張いたし候様は若狭殿ニも神嶋出張有之候様 御意有之候事、……

## 《八月》

③ 一同年八月朔日……

一 若狭殿今日より小ヶ倉へ引移相成候。

④ 同 朔日（天気）

今朝四ツ時比、英船壹艘入津いたし候事、月代いたし四郎嶋出張いたし候事、若州并左馬殿出張之事

⑤ 同 三日 (天気後陰)

一 今日柳ノ浦若州へ為見廻参候事

《九月》

⑥ 同 十日 (朝天氣)

一 今朝六ツ過比、嘆咭り船都而致出帆事

一 右二付明十一日分若狭殿始引払之義、致手当候事

一 同晩若狭殿へ為暇乞、小ヶ倉参り候事

村田は、八月一日から佐賀藩が独自に建造した台場がある長崎湾東岸の小ヶ倉<sup>こがくら</sup>を拠点にしたようだ。白帆注進があったり、イギリス船が入港したりすると、神ノ島<sup>かみしま</sup>や四郎ヶ島へも出掛けている。長崎へ藩主が視察に来ると、警備陣を代表して慰労の言葉を受けてもいる。九月一〇日にスターリングの乗るウインチェスター号を含む全ての英艦が出港すると、翌一日以降に長崎から引き揚げている。

諸史料に安政元年に長崎を訪れたことを示すものがないこと、二年に長崎仕組方頭人に任じられて現地に赴いていることを考え合わせると、村田が安政元、二年の間に長崎にいたのは二年七月一九日～九月一日ごろに絞られるのではないだろうか。

(三) 拾得書物

(a) 拾ったのは何の本か

村田が長崎で拾得した物については、①英語聖書説、②オランダ語聖書

説、③伝道用トラクト説など諸説伝えられている<sup>(24)</sup>。ただ、フルベッキは村田への授洗後まもなく記したとみられる前掲『The First Baptism of Converts in Japan』で次のように記している。

そして彼が私たちに話すには、一二年もの昔、恐らくは一八五四年ごろ、最も早い時期に日本にやって来た米国が英国の船から落ちたのであろう英語で書かれた一冊の小さな本 (a little book in English) が、長崎湾に浮かんでいるのを何人かの地元の者が見つけた。この本は彼の手にするところとなり、……実はそれは新約聖書だった。(筆者訳)

また、明治二七～二八年ごろに、村田の孫から村田家に言い伝えられていた話を聞いたある牧師が、拾得した本は「英語の書物でありました」と記している<sup>(25)</sup>。村田の死去から二〇年ほどの時点である。

村田から直接話を聞いたフルベッキが、「漂流していた英語の新約聖書を村田が入手した」と明記していることに加え、村田家に言い伝えられていたことを考え併せると、村田が長崎港の漂流物を入手したことは一応事実であったと考えられ、その漂流物が何であったかは英語聖書説に分がりそうだ。

拾得した書物のその後については、明治三七年時点で「若狭守が一八五五年に長崎湾で拾った本はオランダ語の新約聖書であり、それは今も家族が所持している」(筆者訳)とされている<sup>(26)</sup>が、村田直系のご子孫(横浜市在住)によると、「過去の資料は何も残っていない」とのこと、現在行方は分らない。

(b) だがいつ、どこで落としたものか

どの書籍も、村田が入手した本を「誰が落としたとも知れぬ本」として  
いるが、一八七二年、英国教会の香港ヴィクトリア教区主教が英国で次の  
ような講演をしているのは注目される。<sup>(27)</sup>

……長崎周辺で起きた興味深い事実について、お話をさせていただきます。  
その地で任務についていた大英帝国海軍バラクータ号のある海  
軍少尉候補生が、手に持っていた一冊の本を誤って船から長崎港に落  
としてしまいました。それは、真鍮の金具で頑丈に縁取りされた(英  
国教会の)祈禱書でした。船は出港し、本のことは忘れられてしま  
いました。暫くしてから、漁師がその本を引き揚げ、それは誰か外国人  
がなくなったものだと考え、何か言いがかりでもつけられないかと非常  
に心配になりました。彼は少々離れたところに住むある紳士に持ち寄  
り、何が書かれていて、価値があるものなのか知りたいと求めました。

(筆者訳)

さらに一九一〇年に英国で刊行された本にも同様のことが出ているが、  
海に落ちたものは聖書で、出来事があったのは一八五四年、漁師が本を持  
参した先は、港の警備に当たっていた佐賀藩の村田若狭、とされている。<sup>(28)</sup>

バラクータ号(Barracouta)というのは、「英国東印度艦隊司令長官海軍  
少将ゼームス・スターリング、旗艦ウエンチエスターニ座乗シ、エンカウ  
ンター・スチックス・バラコータヲ率ヰテ長崎ニ来リ」<sup>(29)</sup>と記されているよ  
うに、スターリングが率いた艦隊のうちの一隻である。砲六門を備えた一  
八五一年建造の木造外輪蒸気船であった。<sup>(30)</sup>バラクータ号の乗員が記した航

海記によると、同号はクリミア戦争の対戦国ロシアの軍艦を追って極東海  
域を広範に航海しており、長崎での滞在期間を読み取れる記述は次の通り  
である。

①《到着》(一八五四年) 九月七日午後、我々は九州島を視認した。  
……我々が高鋒島の湾(長崎港外の投錨地)に入ると、役人の乗った  
船がたくさん近づいてきて、……

《出発》一〇月二〇日朝、船は進み始めた

②《到着》(一八五五年) 八月二七日、長崎を取り巻く山がちな土地が  
視界に入り、二八日に我々は入港した

《出発》我々は一〇月一日、上海に向けて出航し、三日に到着した  
(筆者訳)

以上から、①一八五四年九月七日(安政元年閏七月一五日)～一〇月二  
〇日(八月二九日)、②一八五五年八月二八日(安政二年七月一六日)～一  
〇月一日(八月二一日)に長崎湾にいたことが分かる。<sup>(32)</sup>

次にバラクータ号の停泊場所が分かる史料を挙げる(いずれも安政二年  
七月)。

同 十六日 曇後雨

一 同四ツ時比、伊王崎乗廻、辰ノ口辺ニ而碇を入候事

但シエキリス船ノ蒸気軍艦と有之候由、未タ内目ニハ不乗入、前  
断之通碇泊罷在候事

同 十七日 天気

一 十六日渡来之蒸船、如何之訳ニ而高鋒内不乗入候哉、……

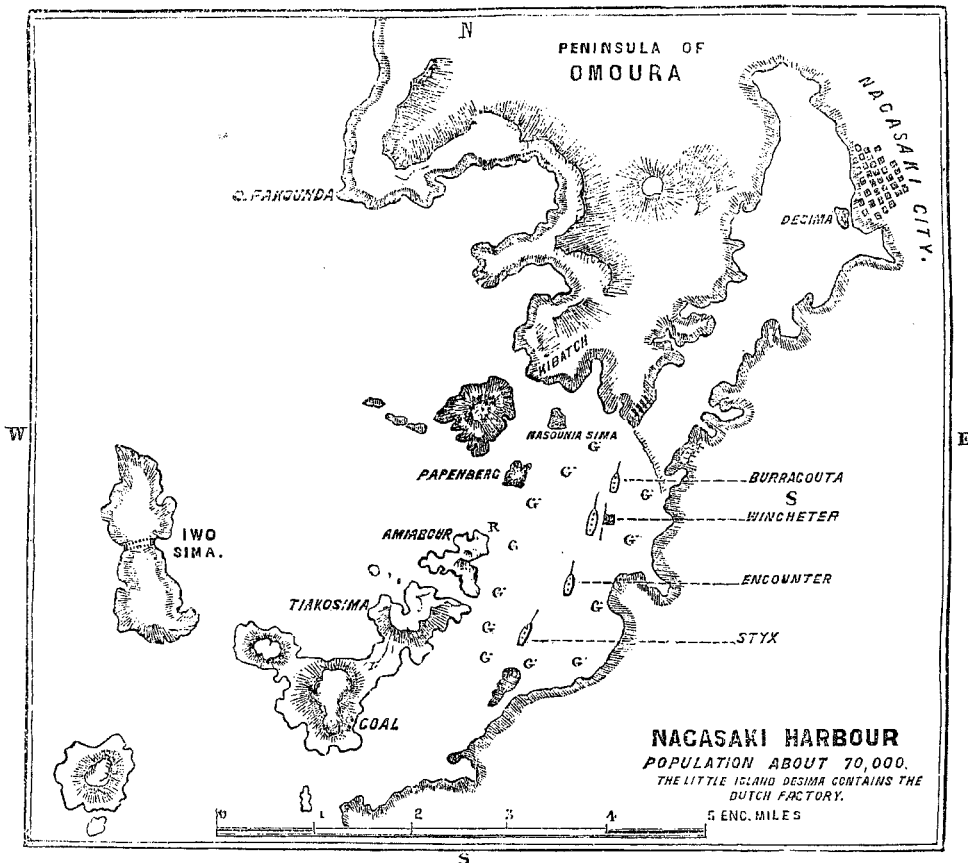
同 廿日 雨晩雷

一 夜前分風相立、……十六日入津ノ英船高鋒内へ入り、神崎前へ碇を申候事

先に見たようにバラクータ号は同年七月一六日に長崎に到着しており、「十六日渡来之蒸船」「十六日入津ノ英船」は同号のことである。

安政当時、長崎警衛に当たっては、湾の西岸・男神と東岸・女神を結ぶ封鎖ラインに小舟を並べ、内側の港内（内目）に外国艦船を入れないことが基本方針であった。<sup>(33)</sup> これら史料から、バラクータ号は当初、封鎖ラインより六<sub>ロ</sub>ほど離れた伊王島辺りにおり、四日後に高鋒島の内側に入ったことが分かるが、それでもまだ封鎖ライン外である。また、安政元年の英国艦隊来航時の様子を書いた『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』掲載の地図（図参照）を見ると、四隻とも港外（外目）に停泊していたことが分かる。安政三年に英国艦船が封鎖ラインを突破し、港内に乗り入れる事件が起きて大騒ぎになっており、元年・二年の際は港内に乗り入れた艦船はなかったものと考えられよう。<sup>(35)</sup>

そして外目を取り巻く陸地は伊王島や香焼島などの離島も含めてすべて佐賀藩深堀領であった。さらには、長崎港内外に設けられた七カ所の台場のうち、外目の四カ所はすべて非番の藩の受け持ちであった。<sup>(36)</sup>





## (c) どのように入手したのか

拾った者から村田が入手するまでの経路についても様々に書かれてきた。①村田が海上に浮かんでいるのを見つけ拾わせた、②家臣（古川礼之助）が見つけ拾った（拾わせた）、③漁民など地元民が海上で拾い村田に届けた、などが主なものである。<sup>37)</sup> 古川というのは、村田家御式台役を務めていた物成三五石の村田家家臣である。<sup>38)</sup>

先に見たフルベッキ書簡では、「長崎湾に浮かんでいるのを何人かの地元の者が見つけ」「この本は彼の手にするところとなり」（筆者訳）、また前項で見た *Spirit of Missions* の記事では「漁師がその本を引き揚げ……少々離れたところに住むある紳士に持ち寄」ったとされており、③と同じか近い内容である。村田から直接話を聞いたフルベッキが記したことを重視すると、長崎湾岸の住民が拾得して村役人などに届け出、それが古川を経て村田の手に入ったというところではないだろうかと考えるが、もちろん推測に過ぎない。

以上 (a) ～ (c) の考察に (二) でみた村田の長崎滞在時期を考え併せると、村田が洋書を手した経緯は次のように考えられないだろうか。安政二年七～八月に長崎港外に停泊中だったバラクータ号から海上に落ちた英語の新約聖書が佐賀藩の領民によって拾われ、同時期に長崎仕組方頭人として警備に訪れていた村田がこの新約聖書を手したか、または安政元年九～一〇月にバラクータ号から落ちた後に佐賀藩の領民に拾われ、いずれかに保管されていたものが、翌二年七～九月、警備に訪れていた村田が手に入れるところとなったのだ、と。

## (四) 家臣らの派遣

村田は、入手したキリスト教書の解明を進めるため、家臣や弟をフルベッキのもとに派遣して学ばせた。派遣されたのは、江口梅亭、本野周蔵、綾部幸熙らだとされる。

本野と綾部については、すでに拙稿「幕末期プロテスタント受洗者の研究 (一)」で詳しくみた。ここでは、これまで詳細が語られたことのない江口に絞って検討してみたい。

江口は、『佐嘉城下町竈帳』の「嘉永七年・材木町竈帳」に「若狭殿家来／十五才 江口梅亭<sup>39)</sup>」、前掲「御屋敷詰役々」には「御医師 江口梅亭」とあり、佐賀城下に住む村田の侍医で、天保十一年の生まれであることが分かる。

また、「相良（相良知安＝筆者注）は……長崎にボードイン<sup>40)</sup>に就いて学術を弘めて、医生を鼓吹せり。かくて遂に戸塚に代りて院長（長崎養生所〈精得館〉のこと＝筆者注）となり、我生徒の島田芳橘、永松東海（玄洋の子）、江口梅亭等の名医を養成したりしかば<sup>41)</sup>」とされており、長崎に遊学して長崎養生所で相良知安に就いて学び、藩内では名医として知られていたことが分かる。

明治二年の史料には「好生館指南役壺人差明居候ニ付左之人義御雇ニシテ指南方被 仰付候様之事／若狭殿家来 江口梅亭／巳二月十九日 御仕組所<sup>42)</sup>」とあり、佐賀藩立の医学校、好生館の「指南役」になっている。さらに、明治一二年には郡立となった同館の院長心得になった。<sup>43)</sup>

このように、経歴の概要は分かるのだが、フルベッキの書簡などに江口と分かる形で登場しているわけではなく、村田のためにどのような行動をしたのかはつきりしない。だが、フルベッキが長崎に住み始めた安政六年

の直後に接触したのではないかと推測できる記載がフルベッキ書簡にある。次節で併せて述べたい。

### (五) 上海から漢訳聖書を「取り寄せた」こと

村田が漢訳聖書を入手したことは多くの既刊書が記している。中には、家臣らを上海に派遣して手に入れたと記述しているものもある<sup>(44)</sup>。

聖書の漢訳版出版は、イギリス人宣教師モリソンが一八一三年に中国・広東で新約聖書全体に相当する『新遺詔書』八冊を出版したのに始まる。さらに、旧約聖書を翻訳した『旧遺詔書』と『新遺詔書』の改訂版を合わせた『神天聖書』二一冊を、イギリス人宣教師ミルンとの共訳で二三年にマラッカで出版した。その後、イギリス人宣教師メドハーストを中心として改訳が進められ、五二年に『新約全書』、五四年に『旧約全書』が上海で刊行された<sup>(45)</sup>。このように、日本の安政期までには新旧両聖書の漢訳版は出版されていた。

他方、日本人の海外渡航が解禁されたのは慶応二年のことだ。それ以前に日本人が海外に渡ったのは、幕府による使節団（三回）、留学生（二回）派遣と、長州藩士及び薩摩藩士の密航のみである。漁民らの漂着例を除けば、安政～文久期に日本人が海外へ行ったり、自身の代わりに誰かを行かせたりすることはあり得ないことであつたはずだ。佐賀藩関係者の上海密航も、慶応元年の二人を除けば知られていない<sup>(46)</sup>。

よって、村田が家臣などを独自に上海に送って漢訳聖書を入手した、という記述には大きな疑問符を付けざるを得ない。当時が自由に海外と往来できない時代であつたことを改めて想起すべきである。

ところで、村田の受洗を詳しく記した前掲フルベッキ書簡“The First

Baptism of Converts in Japan”には次のような記述がある。

私が出した数通の手紙や報告書で、聖書の研究に取り組む五人の仲間たちの話があつたと思う。これらの男性たちは、横浜<sup>(ママ)</sup>（長崎の誤りであろう＝筆者注）から二日のところにある、日本でも最も開け、かつ勢いのある都市である日藩の城下町Sに住んでいた。彼らは長老派を中心とした中国の布教団体の印刷所から取り寄せた聖書や本、小冊子（Bibles, books and tracts from the Chinese mission presses）を私から入手してから長い時間が過ぎていた。一八六〇年には既に、私は三月にSにいくらか本を送ったし、一八六一年五月にも『新約聖書』を何冊か、さらに『キリスト教証驗論』（*Evidences of Christianity*）を送った。（筆者訳）

前掲「幕末期プロテスタント受洗者の研究（一）」で示したようにHは肥前、Sは佐賀のことであり、「五人の仲間たち」とは村田、綾部、本野などのことであると推定しうる。村田はフルベッキから聖書や『キリスト教証驗論』などの本、小冊子を入手していたのである。「中国の布教団体の印刷所から取り寄せた聖書や本、小冊子」とは前述の漢訳聖書や、フルベッキが書簡で日本人に配布したものととして挙げている『天道溯源』『寧坡通報』など<sup>(47)</sup>であろう。そして、村田の入手時期はフルベッキ来日の翌一八六〇年まで遡るのである。

大坂の適塾で学んでいた本野が村田の命を受けて長崎に遊学したのは万延元年八、九月（一八六一年九～十一月）ごろであり、綾部が長崎に赴いたのは文久二年秋である<sup>(48)</sup>。となると、一八六〇年や六一年五月に本を送っ

てもらうだけの関係をフルベッキと作れたのは、本野や綾部ではなく、江口において他には考えられないであろう。

村田が漢訳のキリスト教書を見る機会としては、佐賀藩が収集した書籍を見た可能性も考慮に入れる必要がある。

文久二年以前に成立したとみられる鍋島家文庫中の「御蔵書目録」には、『新約全書』二冊と『両眼考』一冊の漢訳キリスト教書が掲載されており、佐賀藩が同年までにこれらの書物を所蔵していたと考えられるのである。<sup>50)</sup>藩収蔵の輸入洋書（地図）を村田が借り出していたことが分かっており、<sup>51)</sup>漢籍も借り出して見ることはできたのではないだろうか。

このほか、文久二年の上海派遣使節に佐賀藩から加わった中牟田倉之助（後の海軍中将）のことも注目される。『中牟田倉之助伝』によると、中牟田は上海から多くの購入書籍や自身による写本を持ち帰っており、その中にキリスト教関係書が一〇冊ほど含まれている。『旧遺詔聖書』『新遺詔聖書』『新約全書』『四書翻訳ノ英書（但英板 二冊）』『天父皇上帝言題皇詔（四年寅）』『天命詔旨書（三年）』などである。<sup>52)</sup>

「子爵は六月十二日、英人ミュールヘッドを訪ねしとき、長髪賊著述の書四冊を借用し来りぬ。翌日の日記に『終日写本』とあり。十九日、二十日、二十三日、二十四日、二十五日、二十七日の如きは終日旅宿に籠居して『賊の書』を写せり」としており、ロンドン伝道協会のミューアヘッドを訪ね、「長髪賊」（太平天国）が刊行した書籍を借りて何日も旅宿で書き写している。そして、入手した書籍などは「帰国の後、……其筋に上納」<sup>53)</sup>しており、その中には『新約全書』『四書翻訳ノ英書』が含まれている。<sup>54)</sup>

中牟田とキリスト教との接点は大正五年の死去まで見出せず、その彼がなぜ多数のキリスト教書を必死に集め書写したのか、不思議に感じざるを

得ない。「其筋に上納」という言葉からは、キリスト教書の収集は命じられたものであった可能性を窺わせる。

#### （六）受洗時の状況

慶応二年四月六日（一八六六年五月二〇日）、長崎における村田と綾部の受洗が、なぜそのタイミングで行われたのかについて触れている既刊書はないが、次の史料からは意外なその理由が分かる。<sup>55)</sup>

亡鍋嶋孫六郎殿（原注・深堀・茂辰）十七年忌二付、村田若狭殿四月三日浜八丁立・八丁立深堀屋敷御着崎、尤五嶋町深堀屋敷止宿

長崎で村田・綾部の実父である鍋島（深堀）茂辰の法事があったのである。村田が綾部と共に長崎を訪れる機会は簡単には作れなかったはずであり、実父の法事はまたないチャンスであったはずだ。到着した四月三日は西暦の五月一七日であり、後述のように着いたその日にフルベッキとの初対面を果たしている。

次の史料は、受洗に同行した村田の近習・永松七郎助が晩年にノートに書き残したものであり、受洗前後の村田の行動が詳しく分かる。<sup>56)</sup>

一、政矩公、龍吉郎・久吉郎公ノ御兄弟ト共ニ、長崎表鍋島直正公（後閑叟公ト云）ノ新ニ御造築ニ成リシ神ノ島御台場、且又英国軍艦御縦覧相成、泉屋良助宅御滞在ノ上、左ノ向々御訪問ノ節御供

フルベッキ教師、ボートウイン医師（政矩公御診療ヲ受ケサセラル、此節通弁ハ相良洪菴ナリ）

ピンヤトル豪商人<sup>(56)</sup>

一、全表写真師へ御三人御撮影トシテ御出之節御供、其時写真ニ御供致候人々ニ限り御写真壺枚ツ、被為拝領候、于今保存致居候（其当時写真師ハ長崎中ニ壺人ナリシ由）

右所々御縦覧ノ末、フルベッキヨリ御案内申上候ニ付、御出ノ節、此時モ御供、御土産トシテ左ノ品々御持越相成候

一白羽重<sup>(ママ)</sup>壺着 一白縮緬<sup>(ママ)</sup>壺着 其外

其時、御宴会中御携帯アリシ極上等ノ御印籠壺個（此品ハ安野善五左衛門七年間モ懸リ製作セシ品ナリ）、直ニ御手渡被下候、其後二ヶ月余、本国へ更ニ注文シテ、桐ノ御紋附時計三個、御銘々方へ御返礼トシテ差送来候

一、政矩公ヲ始メ御兄弟ヲ御引連、伊万里灣其ノ外御縦覧トシテ御越相成候、其時モ御供、先ツ同所御被官松尾貞吉方<sup>(57)</sup>へ御出、四五日間御滞留中、左之人々ヨリ献金致度願出候ニ付、御帰館ノ上士族ニ被召成候

一、金百五拾円献納 元御被官松尾貞吉 一、金百円全上 元

全上前田喜惣次<sup>(58)</sup>

一、右ノ末ニ有田皿山へ御出、全所御被官中島清藏宅ニ御滞在、其時ノ代官石橋三右衛門罷上リ、所々御出ノ節ハ御供致シ、別テ御心配申上候

一、陶器製造場、製窯場 其他

其時左ノ人々ヨリ献金致度願出候ニ付、御帰館ノ上士族ニ被召成候

一、金百円 元御被官中島清藏 一、金百円 全上蒲地兵

右衛門<sup>(60)</sup>

史料には日付がないが、村田の息子二人が同行していることやフルベッキと二度面会していることが、慶応二年の村田・綾部受洗について詳述している前掲のフルベッキ書簡“The First Baptism of Converts in Japan”と符合しており、記載内容は同年のことと推定できる。書簡によると、一八六六年五月一七日に初めて会って授洗することが決まり、フルベッキが三日後の二〇日日曜日を指定したことになる。フルベッキヨリ御案内申上候ニ付」という文言はそのような経緯を示しているとみることができる。両者が贈り物の交換をしたことも分かる。

この史料を見ると、全行程で少なくとも半月はかかったであろう視察や外国人訪問といった旅の中の一齣として、受洗があったことが判明する。鍋島直正は慶応元年にボードウインの診察を受けており、村田の受診はそれに習ったものであろうか。伊万里と有田皿山は、「松浦郡三郷には、有田の陶器、伊万里の商業、山代の石炭鼎立してその利益をなすに至れり」と称された佐賀藩の先進殖産興業地域であった。伊万里には、安政六年に嫡子時代の鍋島直大、文久元年に直正、慶応二年にボードウインを案内して前出鍋島直高夫妻、慶応二年に再度直正（隠居後）が訪れており、この視察もそれらに習ったのであろうか。

「御親類家来私領外住居名書」によると、伊万里・皿山で訪ねた松尾ら四人はいずれも村田家と関係の深い有力者らであったことが分かる。領地外に住む村田家の家来は侍・中小姓・歩行・被官・足輕の五種類であったが、中小姓として松尾喜兵衛（伊万里郷新町）、前田喜三次（同）、被官として蒲池兵藏（皿山赤絵町）、中嶋儀平（白川山）の記載があり、士分に取立



て多額の献金をさせるのも目的の一つであったとみられる。

### (七) 家老の辞職・引退

村田が受洗したことで、藩から処分を受けたとの記述が既刊書のいくつかに見られる。前掲『聖書を読んだサムライたち』は「若狭守は、藩主に自分の回心について報告をしたようですが、開明派で外国の文化にも理解を示していた藩主鍋島直大は、村田政矩が家老職を退き引退するという形を取ることで事を治めました」と記す。一八六七年一〇月一九日付のフルベッキ書簡に、「わたしどもの同信の兄弟、佐賀の若狭からのたよりで、同氏が長男に職をゆずり藩の重職を辞したとのことです。それで、移動が自由だから、来春、この港に来る意向です<sup>(65)</sup>」とあることなどが記述の元になっているのであろう。

親類同格・諫早家の「日記」の慶応三年九月七日（一八六七年一〇月四日）条には「若狭様御事、御隠居御願被成候」とあり、理由については村田の使者が「近年多病」などと説明したと書かれており、この頃に村田の「引退」に絡んだ動きがあったことが裏付けられる。

しかし、「日記」同月一〇日条には「病之儀者緩々御養生被相加候様、依之願書被差返候」とあり、隠居願は認められなかった<sup>(66)</sup>。表から分かるように、実際に隠居した事実はない。九月七―一〇日の間に若狭はフルベッキに手紙を書いたのであろう。そこでは翌春には長崎を訪れると早々と約束しており、病気であったとはとても思えない。

フルベッキの一八六八年一二月一九日付書簡では、「この老紳士はバプテスマを公表することを本当は恐れておりますが、自分のバプテスマのことを家族の者にも藩主にも、秘密にせず、キリストを信ずる以外に日本の

救いはないという自分の確信をはっきりと話したのです。藩主は譴責も処罰もせず、却って承認を与えたのです<sup>(67)</sup>」とある。

受洗の事実が知られ、若狭はそれがある意味で利用して隠居し身軽になろうとしたが、藩主から止められたのではないか、とまで言うとは推測が過ぎるだろうか。

このほか、「天皇の政府は若狭の改宗を聞きつけ、藩主に処罰を求めた。この命令に服従する見せかけとして、問題の本が何冊か燃やされただけだった<sup>(68)</sup>」（筆者訳）との記述も見られるが、明治新政府がこのような動きに出たかどうかは史料を見つけられず真偽不明である。

### (八) 死去までの晩年の様子

前掲一八六八年一二月一九日付フルベッキ書簡には、「先週の水曜日、まったく意外にもわたしの友人で信仰の兄弟の若狭がここに来ました」とあり、突如、村田が長崎のフルベッキのもとを訪れたことが分かる。続いて「この度、若狭はバプテスマを受けさせるため息子と家来の一人、医師を伴って来たのです。今晚六時、わたしは受洗した父親とわたしの妻の面前で前記二人にバプテスマを授けました」とあり、村田の目的は息子と家来の計二人に洗礼を受けさせることであった。

先述の如く村田には龍吉郎と久吉郎の二子がおり、どちらかを連れてきたのであろう。「家来」については、前掲「長崎のフルベッキ」は「榎本という医師」としているが、根拠史料は挙げられておらず、また村田家の家臣名簿類を見ても榎本という医師は見えない。

一八六八年一二月は慶応四年一〇、一一月ごろである。その前年の慶応三年三月以降、長崎郊外の浦上村でキリシタンらによる自葬が相次ぎ、浦

上四番崩れと呼ばれる隠れキリシタンの露顕事件が発生した。フランス公使の抗議により、捕らえられた信徒らは九月までにいったん帰村し事件は収まった。しかし、江戸幕府を倒した明治新政府は翌年三月、いわゆる五榜の掲示を布達し、キリスト教信仰を厳禁した。四月以降、政府と長崎裁判所間で対策が話し合われ、ついに五月、主導者一一四人が流罪に処された(第一次流配)<sup>(6)</sup>。

さらに八月、佐賀藩は新政府の太政官から「浦上村切支丹信向之徒当分其藩江取締被 仰付候間他ニ浸染不致様厳重取計可有之事」<sup>(7)</sup>を命じられていた。

村田が息子と家臣に洗礼を受けさせたのは、このように長崎の地で、プロテスタントとカトリックの違いはあるが、キリスト教徒が大弾圧されている最中のことであった。こうした中で敢えて洗礼を受けさせた行為は、彼の信仰の堅固さを示していると言えようが、始まったばかりの明治新政府による支配の中で佐賀藩の立場を危うくする危険性を持っていたであろうし、佐賀藩内部においても藩家中最上層に位置する村田自身が藩のなすべき取り締まりに背くことになったであろう。

多くの既刊書には、村田が晩年、領地の久保田に退き、嘉瀬川河畔の小屋に親族や家臣らを集めてキリスト教の教えを広め、聖書の和訳にも取り組んだと記されている。村田家の久保田における屋敷は、現佐賀市久保田町徳万の大雲寺の南側にあった<sup>(7)</sup>。嘉瀬川にもごく近く、村田が久保田で周囲の者にキリスト教の教えについて語ったことはあり得たことだが、裏付ける史料は今のところない。聖書の和訳も裏付け史料は見当たらず、聖書の翻訳史を扱った先行研究でも村田の訳業についての記述は見られず、真偽不明としか言いようがない。

このほか、晩年の久保田での様子を窺わせる史料には次のようなものがある。

一 旦那様暁御飯後、為御道楽久富御番所之方、御越被遊候事

(明治三年五月一七日項)

一 旦那様暁御飯後、御茶屋御道楽被遊候而、暮前比御帰館

(同年同月二九日項)

「旦那様」とは村田を指す。「久富御番所」とは、佐賀市久保田町久富の久保田橋近くに村田家が設けた舟運監視のための番所である<sup>(7)</sup>。村田は領内の久保田新田でバッテリーと呼ばれる洋式の小型船を造らせ、久富川に浮かべて運航実験をしている<sup>(74)</sup>。また、「御茶屋」とは屋敷近くの小路にあった別邸のことだと考えられる<sup>(75)</sup>。佐賀屋敷から五<sup>キ</sup>ほどの領地に暁からいそいそと赴く様子からすると、「御道楽」というのは先に挙げた『鍋島直正公伝』に描かれた村田の「西洋珍奇」の品を愛好する趣味のことであり、領内にはいわば「洋癖の世界」が繰り広げられていたのではないだろうか。龍造寺文書所収の「龍造寺系図」<sup>(76)</sup>によると、村田は隠居後、西麟と号し、明治六年五月一〇日に六〇歳で亡くなった。既刊書には明治五年説や六年説などがあるが、まずは村田家の家伝史料に従っておくべきであろう。

#### 四、結びにかえて——受洗の動機を推理する

これまで漠としたイメージの中で語られてきた村田政矩像が、かなり具体的なものになったのではないかと思料する。村田が周囲から白眼視され

ながら財力に任せて「西洋珍奇」のものを集めていたことや、彼のキリスト教との出会いの元となった漂流書物の拾得が安政二年七、八月頃と推測されること、洗礼が慶応二年であったのは実父の法事で長崎を訪れたタイミングによったことなどは、これまで知られていなかったことだ。最後に村田の受洗の動機について考えて、本稿を締めくくりたい。

この問題は、拙稿「幕末期プロテスタント受洗者の研究(一)」でも触れた。そこでは、英米の先進資本主義という外圧を前に、西洋文明の「優秀さ」を実感した村田と綾部が、その外圧に対して日本を富国強兵に導き、国民を啓蒙したいという「済民救国」的な意識を抱き、それが動機になったのではないかと推測した。ここでは、それに加えて村田家に語り伝えられた逸話を読み解き、村田の受洗動機をさらに深めてみたい。

前掲『活ける宗教と人生』によると、村田の孫、虎吉郎は次のように語ったとされる。

……村田若狭と云ふ人は、……露西亞のペートル大帝を慕つてをりまして、……

……ふと(村田政矩の筆注)心に浮かんだのは、かつて見たことのある、セバストポルの戦に、仏蘭西の軍艦が沈んで行く時の光景を描いた絵でありました。甲板に居列んだ仏艦の将卒の態度には、少しの取乱した所もなく、将に艦と共に沈没せんとして、而も従容として迫らざる態度が、若狭をして深く感激させてをつたのです。彼は、将来は日本にも大きな海軍を作らねばならぬがその際には、絵で見て感激した仏蘭西の海軍のやうな、立派な精神的なものにしたいと切望してをりました。

西欧をモデルとした大改革を成し遂げたロシアのピョートル大帝については、一七九〇年代から一八〇〇年代に前野良沢、桂川甫周、山村昌永が著作で紹介し、写本などを通じて広く社会に知られていた。一八二〇、三〇年代には、会沢正志斎が「新論」、渡辺崋山が「外国事情書」、佐久間象山が「海防に関する上書」で、皇帝に強大な権力を集中させ、上からの近代化で体制を変革し、富国強兵を実現させた英雄として絶賛した<sup>(77)</sup>。村田もこうした著述に触れ、遅れて国造りを始めたにもかかわらず西欧列強と肩を並べるまでに力をつけ、広大な領土を獲得するに至ったロシアを手本にすべし、と考えたのであろう。

佐賀藩主・鍋島直正は安政二年七月二五日に長崎でオランダ軍艦ヘデー号を乗艦視察した際、艦長ファビウスからクリミア戦争で戦闘が行われたセバストポリなどの絵を見せられている<sup>(78)</sup>。この時、鍋島は多数の従者を伴って乗艦しており、前に見たようにちょうど長崎に滞在していた村田も同行し、この絵を見たのかもしれない。そうでないとしても、新型兵器、鉄道、電報などの工業技術が使われ、七五万人もの戦死者が出たほか、従軍記者・画家・写真家が初めて戦争を現地から伝えたことで、近代戦の嚆矢として知られるクリミア戦争<sup>(79)</sup>についての具体的な情報は、長崎にまで届いており、富国強兵を信念とする村田がその絵を見れば興味を持ったのは当然であつたらう<sup>(80)</sup>。

聖書研究を進めることは、彼の中では、ピョートル大帝の崇拜や、海軍を中心とした軍備の強化、殖産興業の推進などと一体をなすものであったのではないだろうか。これら難事業を進める人間を、精神面から支える優れた道徳・倫理としてキリスト教を捉えていたと推測しておきたい。



村田の業績に関しては、明治の終わりから大正にかけて、佐賀県が村田への贈位を国に申請した際の内申書が国立公文書館に六通残っており、領民に先進医療を施したことやガラス、砂糖などの製造に取り組んだことなどが記されている。中には俄に信じがたい事項も含まれてはいるが、村田の人物像をより鮮明にする重要な手掛かりではある。今回は、これら内申書の記載についての考察まで手が回らなかった。今後の課題としたい。

## 注

- (1) 政矩の読み方は、「代々記 上」(鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館)収録の村田家家譜に「タ、ノリ」と振られていることによった。また、政矩は「村田若狭」の名で知られるが、「村田若狭守」と表記している書籍やネット上の著述も非常に多い。近世後期の陪臣で国守を名乗れたのは、朝廷から正式に叙任された徳川御三家と金沢前田家の家老のみである(白根孝胤「近世大名家臣の官位叙任と幕藩権力」〈徳川林政史研究所研究紀要〉三七、二〇〇三年)。「御親類より中老迄代々覚書」上(鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館)の村田政矩の項にも「如願若狭被 罷成」とあり、単に「村田若狭」と記すべきだと思料する。
- (2) 後述のように一八六〇年代から米国のキリスト教系の新聞に掲載されたのち、一九〇〇年に刊行されたWilliam Elliott Griffis, *Verbeck of Japan: a citizen of no country: a life story of foundation work inaugurated by Guido Fridolin Verbeck*, (New York: Fleming H. Revell Co. 1900) (村瀬寿代訳編『日本のフルベッキ』〈洋学堂書店、二〇〇三年〉)の翻訳がある)などいくつかの書籍や新聞で紹介された。最近ではDonald J. Bruggink, Kim N. Baker, *By Grace Alone: Stories of the Reformed Church in America*, (William B. Eerdmans Publishing Company, 2004) や Hamish Ion, *American Missionaries, Christian Ouyoti, and Japan, 1859-73*, (University of British Columbia Press, 2009) がある。
- (3) 中島一仁「幕末期プロテスタント受洗者の研究: 佐賀藩士・綾部幸熙の事例にみる」(『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』八、二〇一四)、同「同(一): 元佐賀藩士・綾部幸熙の信仰と生活」(同九、二〇一五)。以下、前者を便

宜的に(一)とする。

- (4) 高谷道男編訳『ヘボン書簡集』(岩波書店、一九五九年)、同『S・R・ブラウン書簡集: 幕末明治初期宣教記録』(日本基督教団出版部、一九六五年)、同『フルベッキ書簡集』(新教出版社、一九七八年)、岡部一興編・高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』(教文館、二〇〇九年)などと、それらに基づいた諸研究。
- (5) ごく一部を挙げれば、藤井貞文『開国期基督教の研究』(国書刊行会、一九八六年)、家近良樹『浦上キリシタン流配事件: キリスト教解禁への道』(歴史文化ライブラリー三四)(吉川弘文館、一九九八年)、鈴木裕子『明治政府のキリスト教政策: 高札撤去に至る迄の政治過程』(『史学雑誌』八六(二)、一九七七年)。
- (6) 塩野和夫『禁教国日本の報道: 「ヘラルド」誌(一八二五年—一八七三年)より』(東西交流叢書二二)(雄松堂出版、二〇〇七年)七二及び二三五頁による。米国議会図書館ホームページの「米国新聞一覧」によると、『The Sower』(『種蒔く人』紙)は「原初キリスト教の普及及び改訳英語聖書の支持、キリスト教徒の団結に資するため(筆者訳)」に、一八五四年にペンシルベニア州ピッツバーグで刊行された週刊紙。
- (7) G. F. Verbeck, "The First Baptism of Converts in Japan," *A Manual of the Missions of the Reformed Dutch Church in America* (New York: Board of Publication of the Reformed Church in America, 1877).
- (8) G. F. Verbeck, "History of Protestant Missions in Japan," *Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries of Japan*, ed. the Publishing Committee (Yokohama: R. Meiklejohn & Co. 1883).
- (9) 秋山繁雄『明治人物拾遺物語』(新教出版社、一九八二年)三二二—三二六頁。
- (10) J. Maeda, "The First Protestant Believer in Japan," *The Japan Evangelist* 1 (1) (1893).
- (11) これまでに書かれた村田・綾部の受洗物語をよく総合した新しい著述である、守部喜雅『聖書を読んだサムライたち: もうひとつの幕末維新史』(いのちのほとけ社フォレストブックス、二〇一〇年)の第一章「洋上に浮かんでいた聖書・宣教師フルベッキ」の記載内容を主に、佐々木晃「長崎のフルベッキ(一八五九—一八六九)」(『明治学院大学キリスト教研究所紀要』三五、二〇〇二年)の記述で補った。
- (12) 前掲"History of Protestant Missions in Japan", p51.



- (13) 中野礼四郎編『鍋島直正公伝』第三編（侯爵鍋島家編纂所、一九二〇年）四八九頁。
- (14) 明治二年「御意請」（鍋島家文庫〈マイクロフィルム〉、佐賀県立図書館）。
- (15) 「贈正二位公御年譜地取（直正公御年譜地取）」佐賀県立図書館編『佐賀県近世史料』第一編第一一巻、二〇〇三年）七七八頁、嘉永六年十一月一日条。
- (16) 同前、七〇九頁、嘉永二年二月一日条。
- (17) 「大隈伯の宗教談」（『福音新報』三八九号・明治三十五年二月一日付）。
- (18) 「御親類御家老諸役」下（鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館）。
- (19) 「蒸気船渡来録」（『佐賀県近世史料』第五編第一巻〈幕末伊東次兵衛出張日記〉、二〇〇八年）三三八、三三九頁。
- (20) 「直正公譜」（前掲『佐賀県近世史料』第一編第一一巻）二四二頁。
- (21) 前掲「直正公譜」二二三頁の安政元年三月八日条に「今年長崎当御番被為蒙仰候御奉書」を藩主が見たとあり、同二四二頁の同二年七月二二日条に「御非番所御請取二付、長崎御越」などある。
- (22) 石井孝『日本開国史』（吉川弘文館、一九七二年）一二八～一四三頁、対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、一九九九年）九〇二～九〇六頁、東京大学史料編纂所編『維新史料綱要』二（東京大学出版会、一九六六年）三九頁。
- (23) 引用史料は、①③が杉本勲ほか編著『幕末軍事技術の軌跡：佐賀藩史料「松乃落葉」』（思文閣出版、一九八七年）一六九、一七一頁、それ以外は前掲「蒸気船渡来録」三四三～三四六、三六五頁。
- (24) ①は前掲『聖書を読んだサムライたち』、『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、一九八六年）「村田若狭」項、②はOtis Cary, *A History of Christianity in Japan*, (New York: Fleming H. Revell Company, 1909) p56、山本秀煌『日本基督教会略史 前編』（日本基督教大会事務局、一九二二年）三三頁、③は『日本近世人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇五年）「村田若狭」項など。
- (25) 吉田清太郎『活ける宗教と人生』（雄山閣、一九三四年）四八頁。村田の孫というのは、同志社に学んだキリスト教徒、虎吉郎のことであろう。
- (26) *The Japan Evangelist* 11(7), 1904, p236の補注。
- (27) "A Japanese Convert", *Spirit of Missions* (September 1872) p552.ただし、落ちた本が聖書ではなく英国教会の祈禱書 (Church Service) とやっていたり、この祈禱書を手に入れた人物に授洗した宣教師が米国聖公会のC・M・ウィリアムズとされていたりと、記述に混乱も見られる。
- (28) William Canton, *A History of the British and Foreign Bible Society vol.3*, (London: John Murray, 1910) p462.
- (29) 『維新史料綱要』一（維新史料編纂事務局、一九三七年）六三三頁。
- (30) J.J. Colledge & Ben Warlow, *Ships of the Royal Navy*, (London: Greenhill, 2006) p. 32.
- (31) J. M. Tronson, *Personal Narrative of A Voyage to Japan, Kamtschatka, Siberia, Tartary, and Various Parts of Coast of China; in H. M. S. Barracouta*, (Smith, Elder & Co, 1859) p2, 54, 153, 164.
- (32) 前掲「蒸気船渡来録」三三三、三三九、三四〇頁。
- (33) 木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』（九州大学出版会、一九九七年）一七五頁。
- (34) *The Illustrated London News (Reprint Ed.)*, (Kashwashobo Pub. Co., 1997) の一八五五年一月一三日号・四三頁。
- (35) 前掲『鍋島直正公伝』第四編、三八七、三八八頁。
- (36) 長野暹「長崎警備初期の体制と佐賀藩：防備体制を中心に」（『佐賀大学経済論集』一三七、二〇〇二年）二一九頁。
- (37) ①は前掲"The First Protestant Believer in Japan" 前掲*A History of Christianity in Japan*、前掲『日本基督教会略史 前編』、前掲『日本のフルベッキ』、②は海老沢亮『日本キリスト教百年史』（日本基督教団出版部、一九六五年三版）、前掲『キリスト教人名辞典』、前掲『聖書を読んだサムライたち』、③は前掲*A History of the British and Foreign Bible Society vol.3*など。
- (38) 「御屋敷詰役々」及び「家中知行地米扶持手帳（慶応式初三拾九番 寅六月改之）」（永松亨『幕末維新 永松七郎助史料集』二〇〇八年）一七五、一八二頁。
- (39) 三好不二雄・三好嘉子編『佐嘉城下町電帳』（九州大学出版会、一九九〇年）二二五頁。「若狭殿」には「村田政矩」と原注がある。「梅亭」とあるのは、原史料が翻刻の際には未確認だが「梅亭」の誤りであると思われる。
- (40) アントニウス・ボードウィン。文久二年に來日したオランダ人軍医。ポンペの後を受けて長崎養生所で多くの日本人医師を育てた（青木歳幸『江戸時代の医学』〈吉川弘文館、二〇一二年〉二五〇頁）。
- (41) 前掲『鍋島直正公伝』第五編、四八九頁。

- (42) 前掲明治二年「御意請」。
- (43) 好生館史編纂委員会『好生館史』(一九五五年)一四頁(金子光一監修『社会福祉施設史資料集成』七(日本図書センター、二〇一〇年))。
- (44) 前掲『The First Protestant Believer in Japan』、前掲『日本のフルベッキ』、前掲『日本基督教会略史 前編』など。
- (45) 村岡典嗣「漢訳聖書源流考」(同『日本思想史研究(増訂)』岩波書店、一九四〇年)、海老沢有造『日本の聖書・聖書と訳の歴史(新訂増補版)』(日本基督教団出版局、一九八一年)九八―一〇五頁。
- (46) 富田仁編『海を越えた日本人名事典(新訂増補)』(日外アソシエーツ、二〇〇五年)、多久島澄子『日本電信の祖石丸安世』(慧文社、二〇一三年)。
- (47) 前掲『フルベッキ書簡集』四二・四三頁。
- (48) 本野亨編『苦学時代の本野盛亨翁』(本野亨、一九三五年)三一―三三頁。
- (49) 前掲『幕末期プロテスタント受洗者の研究(一)』三六頁。
- (50) 高山節也「鍋島文庫現存漢籍の収集について」(『佐賀大國文』二三、一九九五年)一五二・一五三頁。
- (51) 松田清編『佐賀鍋島家「洋書目録」所収原書復元目録』(京都大学大学院人間・環境学研究科松田清研究室、二〇〇六年)一一一頁。
- (52) キリスト教関連書の抽出に当たっては、小沢三郎『幕末明治耶穌教史研究』(日本基督教団出版局、一九七三年)第二章「耶穌教宣教師と維新前後の日本文化」・第七節「高杉晋作と耶穌教宣教師ミューアヘッド」と、春名徹「中牟田倉之助の上海体験」(『文久二年上海行日記』を中心に)(国学院大学紀要三五、一九九七年)を参考にし、キリスト教の影響を受けた太平天国の関連書も含めた。
- (53) 中村孝也『中牟田倉之助伝』(中牟田武信、一九一九年)二二九、二五二―二五五頁。
- (54) 「白帆注進外国船出入注進 三」(『佐賀県近世史料』第五編第二卷(二〇一五年)三四一頁)。
- (55) 前掲『永松七郎助史料集』二〇三・二〇四頁。
- (56) ウージェーヌ・ピニヤテル。元治元年に来日したフランス人で、時計・理化学器械などを輸入し、富を築いた。(澤護『ピニヤテル父子』(『敬愛大学研究論集』四九、一九九六年)、富田仁『長崎フランス物語』(白水社、一九八七年)一五〇・一五一頁)。
- (57) 龍造寺氏旧臣の末裔喜兵衛の子で、藩札取り扱いを許された伊万里の両替商(『伊万里市史』(伊万里市、一九六三年)二二〇一頁)。
- (58) 前田包昭という人物のことではないかとみられる。伊万里の大庄屋・前田家の一族であろう(『前田家文書』(『伊万里市史』資料編『伊万里市、二〇〇七年』一九八、三七五頁)、『伊万里市史』建築編(伊万里市、二〇〇二年)二八頁)。
- (59) 有田皿山の有力窯焼である中島家の五代儀平秀実(中島浩気『肥前陶磁史考』(肥前陶磁史考刊行会、一九三六年)五一〇、五七三頁)。
- (60) 鎮晴。明治になってから有田陶業振興のための洪益銀行の設立発起人に名を連ねており、有田の有力者であったと考えられる(前掲『肥前陶磁史考』五一〇、六四七頁)。
- (61) 杉谷昭『鍋島閑叟』(岩波新書)(岩波書店、一九九二年)一三六頁。
- (62) 前掲『鍋島直正公伝』第三編、一四七頁。
- (63) 前掲『伊万里市史』資料編、三七三―三八一頁。
- (64) 「御親類家来私領外住居名書」(久保田町史編さん委員会編『久保田町史』上(二〇〇二年)三四一―三四五頁)。
- (65) 前掲『フルベッキ書簡集』一一三頁。
- (66) 「日記 慶応3年卯6月6日迄 檀那様茂陳公」(佐賀県立図書館、諫早家文書〈複写本〉)。佐賀市の永松亨氏の御教示による。
- (67) 前掲『フルベッキ書簡集』一四一頁。
- (68) 前掲『The First Protestant Believer in Japan』, p.20.
- (69) 前掲『浦上キリシタン流配事件』一四―五二頁。
- (70) 「長崎近傍浦上村切支丹信仰ノ徒ヲ各藩ニ託保ス」の「八月二十三日肥前少将へ」(『法令全書』明治元年、第三百十四、一三二頁)。
- (71) 「佐嘉郡太保郷図」(佐賀藩、一八〇七年(佐賀県立図書館ホームページ・デジタルライブラリー)の「古地図・絵図データベース」)。
- (72) 「佐賀藩御側日記」(明治二年巳九月ヨリ午ノ八月迄)(早稲田大学図書館ホームページ・古典籍総合データベース)。
- (73) 前掲『久保田町史』下、七〇五・七〇六頁。
- (74) 前掲『永松七郎助史料集』二〇七頁。
- (75) 前掲『久保田町史』下、六八五頁。
- (76) 「龍造寺文書(影写本)」(東京大学史料編纂所)。村田家は戦国大名龍造寺氏の後

- (77) 黒沢文貴「江戸・明治期の日露関係…ロシアイメージを中心に」(『日本歴史』八〇二、二〇一五年)、和田春樹『日露戦争…起源と開戦』下(岩波書店、二〇一〇年)三七三・三七四頁。
- (78) フォス美弥子編訳『海国日本の夜明け…オランダ海軍ファビウス駐留日誌』(思文閣出版、二〇〇〇年)一七〇頁。
- (79) オーランド・ファイジズ著・染谷徹訳『クリミア戦争』上(白水社、二〇一五年)二一・二二頁。
- (80) 村田がセバストポリの戦いの絵を見たことについては、前掲『The First Protestant Believer in Japan』、前掲『日本のフルベッキ』四四頁にも載っている。どちらもオランダ人から手に入れたとしている。
- (81) 「故 村田政矩(佐賀県)」(簿冊「大正十三年皇太子御成婚贈位内申事蹟書十七」、国立公文書館)など。